

評伝 柏崎市長 小林治助—燃える男の軌跡—
発行 評伝 柏崎市長小林治助刊行会
代表 小林治助（正明）
著者 吉田昭一
発行日 昭和59年（1984年）8月25日
印刷所 柏崎印刷株式会社
208 ページから 218 ページを引用

原子力発電との出会い

我が国原子力研究の夜明け

原子力の文字が「柏崎編年史」（下巻）に初めて登場したのは、昭和30年11月23日である。極めて早い。この日附は、我が国の原子力発電が、揺籃期へ幕を開こうとしていた時期と全く符合する。記載は、「原子力研究所高崎市誘致運動に活躍中の山田徳蔵（柏崎市比角出身）来柏、原子力産業を柏崎に誘致するよう州崎市長と懇談」とある。

この日附から一週間後の30年11月30日、「財団法人日本原子力研究所」が発足、高崎市は若き日の中曽根康弘代議士の誘致運動もあって、同研究所設置の候補地にあげられた。追いかけるようにして、30年12月の臨時国会で「原子力基本法」など、いわゆる原子力三法が超党派で可決、成立した。自主、民主、公開の三原則と平和利用をうたい、初の原子力研究の扉をひらいたのが、この時である。

しかし、まだ、どのような手順を踏んで取り組んでいいのか、政府関係者すら分らない時代であった。したがって、州崎市長と懇談、原子力産業誘致の話題は出したものの、山田徳蔵氏にしてもその具体的内容を語ることは不可能であったと推測される。この後の展開は何もなかった。原子力研究所の動力試験炉が初の軽水炉発電の火を灯したのは、昭和38年10月26日に至ってからである。

石油の町・柏崎の明暗

吉浦市長、小林助役が「原子力発電」という聞きなれない言葉を耳にしたのは、昭和36年であった。

東北電力新潟支店で、取締役支店長館内一郎氏から「これからは火力発電所でなく、発電の主流は原子力になっていくと思います。吉浦市長さん、柏崎で原子力発電所をどうですか」とすすめられた。しかし、吉浦市長、小林助役は、原子力発電の話聞きにこの時、東北電力新潟支店を訪れたのではない。柏崎市政と産業がかかえていた大きな課題、日本石油株式会社柏崎製油所の縮小—閉鎖傾向に歯止めをかけ、同時に、柏崎地方の電力事情打開のため打診かたがた「火力発電所建設」陳情に

訪問したのであった。

日本石油柏崎製油所は、戦後においても柏崎産業界の代表的看板であった。太平洋沿岸の石油精製各社主力工場が戦時の空襲で潰滅的打撃を受け、そのうえ、昭和25年までGHQ指令で精製設備の復旧拡充は許可されなかった。この空白時代、柏崎製油所は秋田、新潟などととも、わずかに残りえた日本海側の製油所として国内原油を主体に精製に全力を傾け、重要な供給源の役割を果たしてきた。

23年には輸入アラビア原油が柏崎で処理され、これは、戦後我が国の初の外国原油精製であった。金属、機械を主とする柏崎工業界の復興より一歩早く、戦後の生産活動は日本石油によって本格化し、柏崎製油所から納入される同社法人市民税は、市財政を左右する”ドル箱”の存在であった。柏崎は、戦後早々も「石油の町」であったのである。

しかし、日本経済に奇跡ともいえる復興の引きがね、朝鮮動乱を経て30年代に入ると、新技術導入、巨大施設の太平洋ベルト地帯石油コンビナートは、高度成長の牽引車、花形産業としてフル操業を開始した。明治以来の柏崎製油所は、この技術革新の前に、みるみる老朽設備へと転落していった。また、精製工程のなかで産出するC重油の消費が、地域産業ではコナシえなかった。

昭和31年、柏崎製油所は存廃の岐路に立った。この時は、社員の多くが同社室蘭製油所に転勤して閉鎖は避けえたが、縮小傾向は一そう明瞭となった。吉浦市長、小林助役は、いつの日か、突如閉鎖につながりかねない柏崎製油所を存続させる手段は唯一つ、C重油の地元消費に道をひらくしかないと結論を下した。それは、東北電力火力発電所の柏崎誘致である。そして、この建設は、もう一つの産業界の悩みである柏崎電力事情の悪さを、一挙に解消する意図を含んでいた。

当時、柏崎へは3万ボルト送電線1回線が配線されているだけであった。しかも端末線で、柏崎は50サイクル。郡境をこえ、隣りの中頸城郡に入ると配電系統が違って60サイクル。中頸城郡は長野経済圏、中部電力系の影響を受ける端末で、配電系統からいえば柏崎は境界的な位置に置かれていた。市議会は特別委員会を設置、仙台の東北電力本社に対し、6万ボルト送電線に強化してほしいと要請をくり返していたが、ラチがあかなかつた。

吉浦市長は火力発電所用地として鯖石川河畔、現在の下水道終末処理場（安政町）一帯を考え、場合によっては具体的な提案をする肚であった。ところが、館内支店長は「柏崎は原子力発電をお考えになってはいかがですか」と答えるにとどまり、打診に乗る気配は見せなかつた。

帰路、車中で二人は東北電力の回答を反趨した。「市長さん。今日の話、どう思いますか。私達が全く分らない原子力発電などという話を持ち出してきたのは、東北電力にその気がなく、問題をスリかえたんじゃない

ないかと思うのですが」。助役の判断に、市長も同感であった。

実は、東北電力は直江津に火力発電所を計画していた。重化学工業都市直江津は、当時、大工場が高度成長気運をはらんで活況を見せており、柏崎に建設の予定はなかったのである。すすめられた原子力発電は検討の余地もなく、二人の間では棚上げであった。工業界が長い間念願としていた6万ボルト送電線は、37年12月に至ってようやく実現した。

松根宗一氏の示唆

小林治助が再び原子力発電を耳にしたのは、昭和38年5月、市長選挙が終った直後であった。初当選、市長就任の挨拶をかねて理研ピストンリング工業株式会社（現在、株式会社リケン）会長松根宗一氏に会った時である。社長松井琢磨氏も同席していた。

電気事業連合会副会長、日本原子力産業会議副会長、経団連エネルギー委員会副会長などを歴任し、我が国でも屈指のエネルギー通の松根宗一氏は「小林さん、これからの日本にとってエネルギー問題は極めて重要な課題です。柏崎で原子力発電所を考えてみませんか。通産省から、荒浜のあの砂丘の立地調査をしてもらったらどうですか」とすすめた。

松井琢磨社長がこの提案をもう一步ひろげた。「市長さん、あなたに工学だの、科学だのといっても苦手でしょう。原子力発電所の研究も、どこから手をつけていいかわからないと思います。ウチの社の千代君（千代正男氏、現在は熊谷リケン社長）をつけましょう。彼に何でも申しつけて、調べさせたらいいと思います」。松井社長は荒浜出身であった。”給与は理研で持つから、使え”というのである。柏崎市財政は、当時まだ、市長秘書をつけるゆとりはなかった。

小林市長は「就任のはなむけの言葉であり、示唆だ」と、その好意を感じると同時に、「そこまで言われると一まして、我が国エネルギー問題のリーダーの提言だ。こんどは棚上げというわけにはいかん。検討を要する」と受けとめていた。東北電力新潟支店で聞いた館内支店長の言葉が思い出され、電力問題で悩んだ過去の体験がよぎった。

しかし、雲をつかむような思いであった。原子力発電の知識は何一つなかった。次に松根会長に会ったとき「あれは、どうしましたか」と催促されたが、調査に手がついていただけではなかった。原子力と地帯整備の組合せを、漠然とではあるが頭にとどめて考えはじめたのは、昭和40年の半ばころからである。

後年、市長はしばしば「あの頃のことを思うと恥しい」と回想した。だが、「あそこから出発してよかった」とも思った。素朴な不安の感情、手さぐり。原子力との出会いは、国民、市民のそれと少しも変わるものではなかった。

水面下の模索はじまる

最初に脳裏に浮かんだ原子力のイメージは、原子爆弾であった。この連想は、日本民族にとって消しがたい、歴史体験からくる宿命であるが、これにもう一つ、ごく身近かでおきた花火工場爆発事故が重なりあっていた。戦後いくばくもない昭和25年、荒浜の松林にあった花火工場が作業ミスから大誘爆をおこし、多数の死傷者を出した。原爆と花火工場、奇妙な取りあわせであるが、胸中に疑念の雲となったのは、”恥しながら”正直のところであった。ただ、原子力発電が、未来性に富む平和利用のエネルギーで、世界の趨勢もまたここにあるらしいとの認識が、おぼろげながらもたぐるべき一筋の未知の糸であった。

思案の末、住民に迷惑のかからない山中で、しかも摺鉢状の地形の底部に発電所を設置するのであれば実現可能なのではないか、という素人考えに到達した。

摺鉢状の適地をそれとなく探した。あった。隣接する北条町の奥、程平がこの条件に合っていた。山中の部落には、この時すでに住民は一人もいなかった。過疎どころか、見捨てられた無人部落となっていた。

北条町伊部国廣町長に相談もちかけると、「たしかに摺鉢状で広さもまずあります。原子力発電所といわれても分らないけど、新しい科学産業だと思いうから、誘致に骨折ってみてくれませんか」と話は簡単であった。通産省へ出向く前に、一度くらい現地視察が必要だろうと41年7月、夏の暑い盛りの日、ジープで程平を見て地形を頭に入れ、通産省原子力発電課を訪れたのは、8月のことであった。「おそろおそろの切り出しだった」と、後で述懐している。

発電課の香田技官は陳情要旨を聞くや、すぐ「柏崎市長、そこには水がありますか」と質問した。小林市長は「はあ、なにしろ山の中ですから、横穴を掘れば湧き水くらいは出るでしょう」と答えた。一ぺんに程度が知れた。「市長、水というのは原子力発電の場合は冷却水といいましてね、ちっとやそっとの量では駄目なのです。そうですねえ、まあ無尽蔵といった方がよいでしょう。それくらいの水がありませんとー」「なるほど、そういうものですか」

およそ、とんちんかんな陳情であった。講義を聞きに行ったようなものである。そういえば、松根宗一氏は荒浜砂丘を候補にあげていたけれど、あれは冷却用の海水を意味していたのであったか。初めて分った。

原子力発電と水、こうなれば的は荒浜に絞らざるをえない。程平から転換だ。県には、通産省へ行って打診してきたことを報告するとともに、松根氏へは行動開始した、今後の指導を宜敷くと連絡した。一つの政治行動をした後、関係筋へは怠りなく、こまめに報告することが、事後の展開を有利にするものだとして市長は信じていた。

41年、42年、原子力発電所をめぐる行動は、水面下の模索期であ

った。42年に入ると、県に対して「通産省の立地調査を受け入れてほしい」、通産省には「調査地点に柏崎を入れてほしい」と、両面への要請をはじめた。県は通産省と呼吸を合わせるようにして同年11月、立地調査地点を荒浜に決定した。通産省からの委託であり、地質調査はボーリング三本、ほかに弾性波試験、気象調査がその内容であった。そして、これらの調査は43年2月から開始された。原子力発電が、海のものとも山のものとも分らぬながら、半ばオープン形で話題として浮上しかけた。

広大で未開の荒浜砂丘

荒浜村が柏崎市に合併したのは、昭和29年7月である。波荒い北海に沿ってたたずまいするこの寒村は、江戸期の北前船時代から北海道交易、漁網の生産と移出で、海に生き海に雄飛する気概を伝統としていた。新天地北海道へ移住し活躍した村人は多かった。しかし、背後地刈羽村にまたがって約1,000万平方メートル余に及ぶ広大な荒浜砂丘は、未開のまま不毛の地としてひろがっていた。

市村合併時の文書には何もうたっていないが、時の村長牧口義矩氏はじめ村民の願望は、柏崎の力で「砂丘地の有効開発」を合併条件に近いほどの重味として込めていた。治助は当時、市会議員であり、牧口村長は妻孝子の叔父に当る。荒浜村民共通の心情は承知していた。

だが、昭和40年代に入ってもなお、この砂丘地開発は難儀な課題として残り続け、適切な政策導入は、しぼり切れていなかった。相手が広大すぎたのである。折から我が国は高度成長の躍進期で、太平洋ベルト地帯に向けて、“民族移動”ともいえる人口集中がはじまり、技術革新に裏付けられた巨大開発は、公共、民間レベルを問わず花盛りであったが、北辺のこの未開の砂丘地に、陽が射しこむ熟度には、まだ縁遠かった。

柏崎市議会は41年6月、荒浜砂丘地に陸上自衛隊を誘致することを決議した。演習場として活用を意図したものであった。背景に、減少してやまぬ人口の歯止め策、さらに豪雪など災害連続の記憶が生々しく残っていた時なので、いざという緊急の際には、心強い救助隊の存在といった思惑もひそめられていた。市勢に曙光を求めながら、砂丘地開発についていえば、方向感覚の定まらない“苦しまぎれ”の思いが漂う。

翌42年12月、市議会は自衛隊誘致特別委員会を設置した。議会の意向にそって、小林市長も防衛庁に誘致陳情におもむいたが、アッサリ断られた。防衛庁の言い分は、「砂丘地は演習場に向かない。重車両が自由自在に動き回れないからだ」。しかし、「もし柏崎市が砂丘全域に1メートルくらい土を盛ってくれば話は別だ」と、疑問をつけた。眉つばな回答だと感じたが、要するに防衛庁側に荒浜進出の意思はなかった

のである。

柏崎青年会議所の提言

次に、荒浜砂丘をテーマとして取りあげ、考察したのは柏崎青年会議所であった。昭和42年、同所は創立10周年の記念事業として「柏崎社会開発計画」に取り組み、市民意識の動向をさぐるアンケート調査をもとに、「荒浜砂丘の総合開発を目的とする開発事業団の設置」を提言している。

43年に発行された同所の社会開発計画報告書は、荒浜砂丘を重視して次のように触れている。

「柏崎、刈羽にまたがり広大で未開で、それだけに魅力ある荒浜砂丘を将来どのように開発してゆこうというのか、そのマスタープランを現時点に立って広域的に考察してゆくことが、必要な段階にきている。刈羽村においては、砂丘地農業のパイロット事業導入をいま試みている。柏崎市においては中越工業開発港の外に原子力発電、自衛隊誘致などをここに目論んでいる。おのおの単独の立場で考えられている開発方式は、このへんで統合されてみなければなるまい。と同時に、この土地確保のための先行投資がどうしても前提となることを忘れてはならないと思う。土地確保のための具体的方策が、政策の展開に先行されなければ、机上の幻想に終る公算が極めて強い。柏崎の今日の姿を、大きく変えてゆく原動力となるもの、それは荒浜砂丘地にあるとあってよいのではあるまいか」

柏崎青年会議所のこの社会開発計画は、50問にのぼる市民アンケートで（回収1、289通）、健康と環境、教育と福祉、都市計画、レクリエーションと消費生活、柏崎の将来の各項に分れ、総合性を備えていた。そして、50問目の最後に「どれが一番重要なアンケートか」の問に対し「荒浜工業港の拠点化」という答えは5番目に入っていた。当時から市民の関心の多くが、この砂丘地に注がれていたことがわかるのだ。中越工業開発港は砂丘を掘り込んで改築し、臨海工業地帯の造成を夢見る構想であったが、これとても政治目標の域を出るものではなかった。いずれも不確定な時代であった。わずかに青山農場の品田正夫氏が、不毛の砂丘の一角に挑み、苦労の末に砂丘地農業経営を軌道にのせているのみであった。